

形容詞スガシ（イ）「清」考

—

シクラメンのかほり （小椋佳 作詞・作曲）

真綿色したシクラメンほど 清^{すが}しいものはない

出逢いの時の君のようです ためらいがちにかけた言葉に

驚いたようにふりむく君に 季節が頬をそめて過ぎてゆきました

うす紅色のシクラメンほど まぶしいものはない

恋する時の君のようです 木もれ陽あびた君を抱けば

淋しささえもおきざりにして 愛がいつのまにか歩きはじめました

疲れを知らない子供のように 時が二人を追い越してゆく

呼び戻すことができるなら 僕は何を惜しむだろう

うす紫のシクラメンほど 淋しいものはない

後ろ姿の君のようです 暮れ惑う街の別れ道には

シクラメンのかほりむなしくゆれて 季節が知らん顔して過ぎてゆきました

疲れを知らない子供のように 時が二人を追い越してゆく

呼び戻すことができるなら 僕は何を惜しむだろう

蜂
矢
真
郷

形容詞スガシ（イ）「清」の存在は、一九七五年に布施明が歌い第17回レコード大賞を受賞したところの小椋佳作詞・作曲「シクラメンのかほり」の冒頭に、「真綿色したシクラメンほど清すがしいものはない」とあることもあって、よく知られている。この歌の「清すがしい」は、右に挙げたように、同じくシク活用形容詞である「まぶしい」・「淋しい」と対比的に用いられている。

しかしながら、この語の古い例を見出すことは困難で、

スガシメ 八田やたの一本ひともと菅すげは 子持こもちたず立ちたちか荒あれなむ あたら菅原すがはら言ことをこそ菅原すがはらと言いはめ あたら清すがし女め（阿多良須賀志實）（記仁徳・六四）

のような、上代にシク活用形容詞スガシがあるとすればその語幹の用法の例と見られるスガシメの例を求めることはできるけれども、スガシク・スガシキなどと活用した例を見出すことができない。『時代別国語大辞典上代編』は、「すがし（形シク）」の項を立てるが、そこに挙げる用例は右のスガシメの例のみである。なお、

スガスガシ 介 到こ坐須賀すか地ち而 詔之 吾来こ此地ち我御心須賀すか斯而 其地作し宮坐 故其地者 於し今云い須賀すか也（記神代）

のような重複形容詞スガスガシの例が見え（中古以降を含めると多く見え）、また、それと母音交替の関係にあるソガソガシの例も見える。

ソガソガシ 菅生 一云 品太天皇 巡行之時 關せ井此岡せ水甚清寒 於し是勅曰 由し水清寒し吾意宗々我々志 故曰し宗我富し（播磨国風土記・揖保郡）

このように、スガスガシ・スガシメの対応が見えても形容詞スガシの例は古くに確認できないが、これと同様の例に、タギタギシに對するタギシ、アダアダシに對するアダシがある。

タギタギシ 詔者（略）然今吾足不し得歩し成し當藝當藝斯形し故号し其地し謂し當藝し也（記景行） 車駕所經之道狹地深淺 惡路之義 謂し之當麻し（常陸国風土記・行方郡） — タギシミミ 生子 多藝志美美命 次岐須美美命 二柱坐也（記神武）

タギタギシは、道が凸凹であつたりして歩きにくい意に用いられている。他に、タギシノヲバマ「於し出雲國之多藝志之小濱し造し天之御舍し」（記神代）の例も見えるが、形容詞として活用した例は見当たらない。タギシミミは、固有名詞であるけれども、上代にシク活用形容詞タギシがあるとすればその語幹の用法の例と見られるが、形容詞タギシの活用した例が確認できないので、スガシメと同様の例になる。

不誠実である、移り気である意のアダアダシに對するアダシ「徒」は、「意味上はアダ（不実）の形容詞形と考えられるが、常に名詞

と複合した形で使われる。アタシ(他)とアダ(不実)との意味の近似による混交の結果生じた語であろう。中世以後の例が多い(『岩波古語辞典』)とあるように、他のものである、異なる意のアタシ「他」と、実のない、いい加減である意のアダナリ「徒」「されど」のをとこをあだなりとききて、つれなさのみまさりつゝいへる(伊勢物語)とが混淆したものと見られるので、やや複雑である。なお、院政期において、アタシ「他」は「他^{アタシ}」(名義抄・高二一才)のように清音タと見られ、アダ「徒」は「英(略)ア^{タバナ}(上上)」(同・観僧上三五「19才」)のように濁音ダと見られる。

アタシ「他」は、古くにシク活用形容詞があるとすればその語幹の用法と見られる例が見え、

アタシトキ 逢ひ難き君に逢へる夜ほととぎす他し時ゆは(他時従者)今こそ鳴かめ(萬一九四七)

アタシタマクラ 天雲の寄り合ひ遠み逢はずとも異し手枕(異手枕)我まかめやも(萬二四五)

アタシココロ 君を措きて他し心を(安太之古と呂平)我が持たばやなよやすゑの松山浪も越え越えなむや浪も越えなむ(風俗歌六・君を措きて)

俗歌六・君を措きて)

アタシフミ 別本云是爲^{アタシフミ}鵜筑紫^{ウヱツシ}嶺縣主泥麻呂犬^{ノミヤノイヌ}所^ノ嚙死^{ノミ}(雄略紀十年九月・前田本)

などのようであるが、アタシ「他」の活用した例は見当たらない。

アダアダシ これを、あだくしき振舞といはゞ、女のありさま、苦しからん(源氏物語・末摘花) — アダシヨ「徒世」 あすし

らぬみむろのきしの根なし草なにあだしよに生ひはじめけん(久安百首一三九〇)

形容詞アダシ「徒」の活用した例は、室町江戸初頃の「かげろふの夕部を待、夏の蟬、春秋をしらぬ、左程あだ敷身を持て、暫の間も楽めかしと、欺ける」(短・諸虫太平記)あたりまで下ると見られる。アダシヨなどは、中古にシク活用形容詞アダシ「徒」があるとすればその語幹の用法の例と見られるが、その頃には形容詞アダシの活用した例が確認できないので、これもスガシメと同様の例になる。

重複形容詞タギタギシに対するタギシは、上代にタギシミニなどの例はあるが形容詞として活用した例が見えず、時代が下っても活用した例が見えない。重複形容詞アダアダシに対するアダシは、中古にアダシヨなどの例はあるが形容詞として活用した例が見えず、時代が下り室町江戸初頃以降にシク活用に活用した例が見える。これら(とりわけアダシ)とほぼ同様に、重複形容詞スガシメに對するスガシも、上代にスガシメの例はあるが形容詞として活用した例が見えず、大きく時代が下ってシク活用に活用した例が見えるものと言つてもよい。古事記歌謡にスガシメの例はあるけれども、上代に形容詞スガシがあるとは必ずしも言えないと考えられることになる。

鈴木丹士郎氏「近代短歌における和語の再生」⁽⁴⁾は、スガシ(イ)が、現代の国語辞典『三省堂国語辞典』第三版、『大辞林』に項として立てられることもあると指摘されるところに、近代短歌に見えるものとして、次の四例を挙げられる。

浅みどり眼に山川はおぼろなれど其処にすがしき水おときこゆ(中村憲吉『しがらみ』一九二四年七月 岩波書店)

朝々の光すがしも向山にひろがりおそき櫟のわか葉(島木赤彦『太虚集』一九二四年一月 古今書院)

ほほづきの青きふくろを手にとりてすがしき歎き我はするかも(土田耕平『一塊』一九四一年五月 同)

守り得し彼らの理論清しきに吾が寝ねられぬ幾年ぶりぞ(近藤芳美『埃吹く街』一九四八年二月 草木社)

なお、憲吉の「浅みどり」歌は一九一八年^(天正七)年の詠であり、赤彦の「朝々の」歌は一九二二年^(大正一一)年の詠である。

憲吉には、右の他に次の例が見える(『中村憲吉歌集』⁽⁵⁾による)。

山上の朝の寢覚めは清しけれ遠した湖に船笛きこゆ(一九二一年^(天正二〇)年詠)

天つ風吹きかはるらし目のまへは霧押し排きてすがしき砂原(一九二八年^(昭和三)年詠)

立つ年と今年しづかなる日かげさし病の床を清しからしむ(一九三三年^(昭和八)年詠)

赤彦にも、右の他に次の例が見える(『赤彦歌集』⁽⁶⁾による)。

汽車とまる柵のそとなる干し麻のにはひすがしも霧を吹く風(一九一七年^(大正六)年詠)

茂山の木の間に靄ののこるらし清しと思ふ光透るも(一九二一年^(天正二〇)年六月七日詠)

わが部屋の畳をかへて心すがし昨日も今日も一人居にけり(同年詠)

春の雨はれてすがしきこのあした目に立つ草のみどりさへなし(一九二二年^(大正一一)年詠)

このごろの山の清しきや稚き子の初毛をなして伸び立つ櫟葉(同)

島なかに手もてわが扱く紫蘇の実のにはひ清しきころとなりにし(同)

庵かこむ高槻の葉に雨多し清しき過ぎて寒き日もあらむ(一九二三年^(大正一二)年詠)

谷川の早湍のこゆる石むらのありの清しき水の底ひに(一九二五年^(大正一四)年詠)

夕顔の花ほの白くたそがれて清しと思ふ月立ちにけり(同)

野苺の赤き実いくつ掌にのせて心清しく思ひけるかな(同)

朝日かげさしの光のすがしさや一群だちの福寿草の花(一九二六年^(大正一五)年詠)

そして、鈴木氏(一)が挙げられていないもので、長塚節の短歌にも五例が見える(『長塚節歌集』による)。

掃かざりし杉の落葉を熊手もて搔かしめしかば心すがしき(一九一二(明治四五)年三月詠)

梧桐の夏をすがしみをりをりは畳の上にねまく欲りすも(一九一四(天正三)年五月詠)

垂乳根の母が釣りたる青蚊帳をすがしといねつたるみたれども(同年五月三〇日詠)

すべもなく汗は衣を透せどもききやうの花はみるにすがしき(同年七月二三日詠)

播磨野は朝すがしき浅霧の松のうへなる白鷺の城(同年六月九日詠)

これら節の短歌の例はいずれも、鈴木氏(一)が挙げられる例や、それらの作者である憲吉・赤彦らの他の例より古いものである点で注意される。中でも「掃かざりし」歌は明治末の例である。なお、『日本国語大辞典』第二版は、「すがしい」の項を立て(初版にはない)、用例に節の「垂乳根の」歌の例を挙げている。

三

さて、前稿『長塚節歌集』の形容詞⁽⁸⁾において、鈴木氏(一)および同氏(二)「現代短歌に見られる形容詞の用法——補助活用の本活用化——」・(三)「現代短歌に見られる形容詞の分類」などが述べられるところをも参照しつつ述べたように、節の短歌には、ケシ型形容詞⁽⁹⁾がかなり用いられ、中古以降には基本的に用いられない未然形ケ・已然形ケが用いられ、x(ヲ)yミの形のミ語法⁽¹²⁾の例が多く、その他、形容詞連体形キ+助詞ロ+助詞カモの例などや、オボホシ・ココログシなど、萬葉集を始めとする上代語の語彙・用法が多く用いられている。

そうしたことを考慮すると、節の短歌に形容詞スガシが用いられているのは、古事記歌謡のスガシメの例を形容詞スガシの例と見て、上代語を用いようとする中での詠であったかと思われる。

節が、萬葉集のみならず記紀歌謡についても詳しかったことは、次に挙げる斎藤茂吉の記述によって知ることができる。

正岡子規没後、節は雑誌馬酔木⁽¹⁰⁾に拠つて歌を発表し、記紀の歌調を研究し、萬葉集の東歌の歌調を研究し、ついで、神楽歌、催馬楽歌の調べ等までを研究するに至つたが、特に『写生の歌』といふことをも唱ふるに至つた。(『巻末小記』⁽¹¹⁾)

かういふ歌風は、節の発明に係るものだと言つてもいいのである。併し、仔細に吟味すると、萬葉集があり、古今集以後があり、子規に教はつた俳諧があり、芭蕉があり、前にいつた神楽、催馬楽、記紀歌謡等もあるので、ここまで行著くには一とほりの勉強などではなかつたことを、私等は沁々と感ずることが出来るのである。(同)

長塚節の歌の発育史及びその構成の内容は(略)正岡子規の指導があつてこれが大体の骨子であつた。それから萬葉集がある。萬

葉集の影響は全般的であるが東歌の調の影響などもあつた。それから記紀があつた。それから神楽催馬楽の影響なども他の同人に先んじて受けた。(「長塚節」)

萬葉や古事記の句を巧に応用し、その声調を体得し、古調と新材料とを融合せしめた手腕は寔に驚くべきである。(「長塚節の歌」)
徒らに多読して自慢するといふやうな風のなかつた人である。それにも拘らず、実際の歌を読んでもみると、実によく萬葉、古事記、催馬楽あたりの言葉や調子を取り入れ、時々驚嘆せしめられることがある。(同)

右の引用に傍線を施した箇所のように、節は、萬葉集のみならず記紀歌謡をもよく知っていたと見られて、古事記歌謡のスガシメの例を形容詞スガシの例と見て、上代語を用いようとする中で形容詞スガシを用いたのではあるまいか。これが憲吉・赤彦らに影響を与えたかどうか詳しくは分らないが、アララギ派の中で影響を与えたことはあり得よう。

四

実は、アララギ派の歌人の短歌の例に、一例のみであるが節の短歌の例より古い例が見える。伊藤左千夫の詠である(『左千夫歌集』⁽¹⁷⁾による)。

はしばみのすがれ黄葉^{もみぢ}のひや露のあなすがしもよ此朝の晴(一九〇九^(明治四二)年詠)

左千夫の短歌については、それほど詳しい調査をした訳ではないが、一通り見たところ、ミ語法など上代語の語彙・用法が用いられているけれども、それは節の短歌ほど顕著ではないのではないかと見られる(この点は、今後検討したい)。

斎藤茂吉『伊藤左千夫』⁽¹⁸⁾、土屋文明『伊藤左千夫』⁽¹⁹⁾等を参照すると、左千夫は、『萬葉集新釈』^(改題後)(「馬酔木」一九〇四^(明治三七)年二月)「アララギ」一九一一^(明治四四)年九月を著したりして、その短歌は萬葉調と言われるが、「俗謡について」(「馬酔木」一九〇三^(明治三六)年一二月)に、

左千夫おもふに、上古の風俗歌例へば古事記応神卷の風俗歌、古事記卷中の夷振、天田振、夷振の片下、続日本紀の難波曲倭部曲や、催馬楽など、さういふ古の俗謡とも云ふべき風俗歌と、今の俗謡とを同一視出来ないものである、要素を異にしてゐる、さうおもふのである。

と書いており、「仁徳天皇之御歌」(「新仏教」同年五月九月)・「御製より観奉りたる仁徳天皇」(「日本及日本人」一九一三^(大正二)年五月)という論もあるので、古事記歌謡を見ていたのは確かである。

また、左千夫には、

ゆづり葉の葉ひろ青葉に雨そそぎ榮^{さか}ゆるみどり庭に足^たらへり(一九一三^(大正二)年詠)

との短歌もあつて、このハヒロアラバの例は、古事記歌謡の

ハビロユツマツバキ……其が下に生ひ立てる 葉広斎つ真椿（波毗呂 由都麻都婆岐）……（記仁徳・五七）……新嘗屋に生ひ

立てる 葉広斎つ真椿（波毗呂 由都麻都婆岐）……（記雄略・一〇〇）

ハビロクマカシ……彼方此方の山の峽に立ち栄ゆる葉広熊白椿（波毗呂久麻加斯）……（記雄略・九一）

を参考にしてゐる可能性が高い。

尤も、茂吉の「伊藤左千夫の長歌と新体詩」（前掲『伊藤左千夫』）は、左千夫の長歌について述べる際に、節の長歌が「若し強ひてその源をさぐれば萬葉ならば卷十三にあるやうな比較的短い長歌、それから古事記の歌謡、神樂催馬楽あたりにも到著し得るものとおもふが、この種のもものは左千夫もさう多く作つてゐない。」としていて、古事記歌謡の影響は大きくないかとも見られる。

無論、「はしばみの」歌のスガシの例がアララギ派の中で影響を与えた可能性はあり得るであらう。しかし、残念ながらそれ以上のところは不明としなければならぬ。

五

一方、「シクラメンのかほり」の作詞・作曲者である小椋佳は、著書『いたずらに』で、

よく読み直してもらえれば気付かれるでしょうが、「シクラメンのかほり」「うす紫のシクラメン」は実在しないものです。これは完全に遊びです。言葉遣いに関しても、「清しい」「季節がほほをそめて」「暮れ惑う」等は皆、北原白秋の詩からの借用です。

と、自ら述べてゐる（傍点、原文）。「シクラメンのかほり」が「実在しない」というのはシクラメンにほとんど香りがないことを、「うす紫のシクラメン」が「実在しない」というのはそのような色のシクラメンがないことを言うのであらう。

尤も、「シクラメンのかほり」が「実在しない」というのは、「香り」の仮名遣が、現代仮名遣では「かおり」、歴史的仮名遣では「かをり」であつて、「かほり」という仮名遣が通常ではないことを意味している可能性がないではない。「かほり」・「かほる」のよな表記の例は、ハ行転呼音の一般化以降にはあり得ることで、「馥」⁽²¹⁾（金光明最勝王經音義、承暦三「二〇七九」年）などの例がある。定家仮名遣でも、「かほる」（下官集）、「かほる 香句 薫」（仮名文字遣）のようで、ホで示される。契沖の和字正濫鈔は、さすがに「薫 かをる」とするが、「常にはかほるなり。萬葉第二に香乎禮流とある故こゝにも出す。常によるへし」と述べており、別に「薫 かほる」ともあつて、ホ・ヲ両用、むしろホ優先となつてゐる。

さて、今、問題となるのは、「シクラメンのかほり」のスガシイが白秋の詩によるということである。白秋の詩を見ると、確かにその中に君は在せり。緑髪肩に波うち、／容顔の清しき、胸に薔薇色の薄きぬはふり、／情界の熱き波瀾に黒瞳にほひかがやき、

／領巾ふるや、夢の足なみ軽らかに現なきさま。(「暮愁」『第二邪宗門』「一九一六」^(天正五) 年七月刊 東雲堂書店)、『白秋全集』1 詩集1による)

清しさよ、／わかうどが朝の瞳の／そのカラの／そのシャツの／その青き麦の帽子の／そのわかき人の世の旅のいそぎの／清しさよ。(「断章 七十」『思ひ出 増訂新版』「一九二五」^(天正四) 年七月刊 アルス)、『同』2 詩集2による)

のような例が拾える。なお、

その帰さ、木々のみどりに／眼醒むれば、鶯啼けり。／山路なり。ふと掌に見しは／梨なりき。清しかりし日。(「梨」『思ひ出』「一九二一」^(明治四四) 年六月刊 東雲堂書店)、『同』2 詩集2による)

の例もあるが、これは「すゞ」と振仮名があつて、スズシの例でありスガシの例とは認められない。

「暮愁」の例も、「断章 七十」の例も、形容詞語幹が接尾辞サを伴ったスガシサの例であるが、形容詞スガシの例と認めてよい。但し、右の「暮愁」の例は、初出(「明星」午歳8号「一九〇六」^(明治三九) 年八月)には、「容顔の清しさ」とあつて(『白秋全集』1 詩集1による)、これはスガシの例ではない。他方、右の「断章 七十」の例は、『白秋抒情詩抄』では、「断章 六十三」として、「清しさよ、／わかうどが朝の瞳の、／そのカラの、／そのシャツの、／その青き麦の帽子の、／そのわかき人の世の旅のいそぎの／清しさよ。あはれ、清しさ。」とあつて、末尾に「あはれ、清しさ。」が加わっている。この「あはれ、清しさ。」には、古事記歌謡のスガシメの例「あたら清し女」の律動が読みとれそうにも思われる。然りとするならば、白秋もまた、古事記歌謡のスガシメの例を形容詞スガシの例と見て用いたものではないかと思われてくる。

これらの例と第二節に見た節の「掃かざりし」歌や第三節に見た左千夫の「はしばみの」歌の例といずれが古いかであるが、「暮愁」の初出の例がスガシの例であればこの例の方が古いことになるけれども、右に見たようにそうではない。また、『思ひ出』に「断章」はあるが、それは「一」～「六十一」であり、その「七十」ないし「六十三」は『思ひ出』ではなく『思ひ出 増訂新版』の例であるので、節の「掃かざりし」歌や左千夫の「はしばみの」歌の例の方が古いと言えよう。

因みに、白秋の短歌にも、スガシの例が見える(『北原白秋歌集』による)。

堪へがてぬ寂しさならず二人来て住めばすがしき夏立ちにけり(『雀の卵』「一九二一」^(天正二〇) 年八月刊 アルス、初出は「国粹」2—8「一九二一」^(天正二〇) 年八月)

朝東風の吹きひるがへす朴の葉は葉おもてひろくすがしかりけり(『白南風』「一九三四」^(昭和九) 年四月刊 同、初出は「短歌研究」

2—12「一九三三」^(昭和八) 年二月、但し第四句「墓原高く」)

光発しその清しさはかぎりなし朴は木高く白き花群(同、初出は「歌と評論」6—1「一九三四」^(昭和九) 年一月)

小さき鐘撞木とりそへ吊したりこの家のはひりすがしとも見よ（同、初出は「こぎやう」13—1「一九三四（昭和九）年一月」）
棚にして見のすがしきは雨あとの通草が綴る蔓の葉の萌（同、初出は「歌と観照」1—2「一九三二（昭和六）年五月」、但し結句「房の新萌」）

山川や青の水泡に棲む魚の山女はすがし眼も濡れにけり『溪流唱』「一九四三（昭和一八）年一月刊靖文社」、初出は「多磨」2—1
「一九三六（昭和一一）年一月」、但し第二句「水泡隠れに」

かむる垂りなげくこの子のあどなさは儒良のごとも清しかりけり『椽』「同」、初出は「多磨」1—4「一九三五（昭和一〇）年九月」、但し初句「額髪」

端溪の硯魚眼すがしくて立秋はいま水のごとあり『黒檜』「一九四〇（昭和一五）年八月刊八雲書林」、初出は「多磨」7—3「一九三八（昭和一三）年九月」

なお、小椋佳の言う「暮れ惑う」については、

日はさしぬ、白楊の梢に赤く、／さはあれど、暮れ惑ふ下枝のゆらぎ……『邪宗門』朱の伴奏 下枝のゆらぎ「一九〇九（明治四二）年三月刊

易風社」、一九〇八（明治四一）年八月作、『白秋全集』1 詩集1による）

の例が確認できるが、「季節がほほをそめて」の白秋の例は未だ見出だすことができないでいる。

六

スガシのその他の例について見る。
次のような例が見える。

雨は清し神路山／二十一日の御盛儀／皇太神宮御参拜の隆典（「玉車奉迎記」小見出し「風俗画報」421「一九一一（明治四四）年六月二〇日」）

右をスガシと訓むならば、左千夫の「はしばみの」歌より新しく、節の「掃かざりし」歌より古い例となるが、キヨシあるいはスズシと訓む可能性もないではない。

また、次のような例も見える。

瀬の音も心すがしき黄昏を、涼みの床の雪灯は、人待ち顔にちらほらと、火影を流す加茂川や、……（九条武子作詞「四季の曲」のうち「大文字」、一九五六年二月道頓堀文楽座 初演）

なお、九条武子は、一八八七（明治二〇）年生、一九二八（昭和三）年没であるが、この例の作詞時はよく分からない。

さらに、次のような例が見える⁽³²⁾。上田秋成の春雨物語（血かたびら）・天理冊子本（秋成自筆）のもので、近世の例があるかどうか問題になる例と言える。

いよゝすがしくて、朝まつり事怠らせたまはす

この箇所は、春雨物語の「下書きの草稿」『日本古典文学大辞典』とされる春雨草紙（秋成自筆）に

あした、御心すゝしくて、朝に出させたまへりき

とあり、春雨物語・文化五年本には

御こゝろ、すかくしく、おひてならせたまふ

とあり、また、同・富岡本（秋成自筆）には

御こゝろすかくしく、朝まつりごと怠らせ給はす

とある。スガシかとも見られる箇所は、スズシとある本もあり、スガスガシとあることが多いようである。しかも、春雨物語（ないし春雨草紙）のこの箇所の少し前にもスガスガシと見られる箇所があり、それは

御心すゝしくならせたまひぬ（春雨草紙）

御心すかくしとて（春雨物語・天理冊子本）

御心すがくしくならせたまひぬ（同・文化五年本）

み心すかくしくならせたまひしかは（同・富岡本）

のようであつて、両箇所は、春雨草紙がスズシ・スズシであり、文化五年本・富岡本がスガスガシ・スガスガシであるのに対して、問題の天理冊子本はスガスガシ・スガシであるので、このスガシはスガスガシの誤りである可能性が高そうである。形容詞スガシが、近世からあるかどうか微妙な例ではあるが、近世からあるとは見ない方がよいのではないかと思われる。

七

因みに、節の短歌には、スガスガシの例も見える。なお、左千夫の短歌に、スガスガシの例は見当たらない。

すがすがしかし櫓がわか葉はに天響あまひびき声ひびかせて鳴く蛙かはづかも（一九〇八（明治四二）年五月詠）

さやげども麦稈むぎわら帽子とばぬ程みんなみ吹きて外はすがすがし（一九一四（大正三）年六月四日詠）

村田菜穂子氏は、鈴木博氏が、両活用形容詞のシク活用フルシ（蒙求抄、中華若木詩抄）の成立について、重複形容詞フルブルシ

（枕草子）との関係をも考慮されるのを引いて、重複形容詞フカブカシ（日葡辞書）・チカヂカシ（落窪物語）・アハアハシ（宇津保物語・嵯峨の院）・ウトウトシ（源氏物語・総角）・オモオモシ（落窪物語）・タケダケシ（太平記^五）・シゲシゲシ（伽・のせ猿さうし）から、両活用形容詞のシク活用フカシ（妙貞問答^六）・チカシ（浮・好色五人女^七）・アハシ（仮・祇園物語^八）・ウトシ（評・色道大鏡^五）・オモシ（玉塵^{三六}）・タケシ（類聚首義・永昌院本）・シゲシ（隣語大方^九）が、それぞれ中世以降に形成されたと考えられる。そして、両活用形容詞に限らず、重複形容詞ハカバカシ（宇津保物語・俊蔭）・マメマメシ（同・楼上下）・ナサケナサケシ（源氏物語・蓬生）から、シク活用ハカシ（史記抄）・マメシ（増鏡）・ナサケシ（伽・福富長者物語）が、それぞれ中世以降に形成されたと考えられることができる^{一〇}。また、第一節に見たアダアダシ（源氏物語・末摘花）―アダシ「シク活用」（短・諸虫太平記^一）も、これに加えられる^{一〇}。とすると、時代はさらに下るが、重複形容詞スガスガシからシク活用スガシ（イ）が形成されたと考えられることもあるいはできるであろうか。

無論、大きな流れとして見れば、重複形容詞からの形成と見ることもできないではないであろう。ただ、左千夫の場合には些かはつきりしないが、節は古事記歌謡のスガシメの例を形容詞スガシと見て用いた可能性があるので、重複形容詞スガスガシからの形成とは見ない方がよいと思われる。

形容詞スガシは、第六節に見たように、近世の例があるかどうか微妙であるが近世からあるとは見ない方がよいのではないかと思われる。仮にその例があるとしても、スガシがよく用いられるようになるのは、第二―四節に見たようなアラギ派の左千夫・節の短歌とその影響下にあるものによるところが大きいのではないかと思われる。なお、第五節に見たところの白萩が、左千夫や節の影響を受けているかどうかは、未だよく分からない。

〈注〉

- （一）「阿多良須賀波良」を「あた^{すがはら}ら菅原」と訓み、「菅原」のように被覆形スガ「菅」が用いられる。〈宜〉をゲと訓んで「比登母登須宜波」を「一本^{ひともと}菅^{すげ}は」と訓み、露出形スゲ「菅」が用いられる。「菅原」の場合に被覆形スガが用いられるのが通常であるので、「須宜波良登伊波米」を、露出形スゲを用いた「菅^{すがはら}原と言はめ」ではなく被覆形スガを用いた「菅^{すがはら}原と言はめ」と訓むと、〈宜〉をゲではなくガと訓むことになるが、このことについては、亀井孝氏「古事記はよめるか―散文の部分における字訓およびいはゆる訓読の問題―」（『亀井孝論文集』4 日本語のすがたとこころ（二）訓読と語彙 [1985・10 吉川弘文館]、もと『古事記大成』言語文字篇 [1957・12 平凡社]）参照。

- （二）スガスガト「すがくとも、えまゐらせたてまつり給はぬなりけり」（源氏物語・桐壺）の例も見える。

- (3) 『新潮国語辞典』は、「ちがつっている。ほかのである。」意のものとして、「殿の御前の御声は(略)あだしう聞えたり」(栄花物語・玉の台)の例を挙げるが、この例は、梅沢本に「殿の御前の御声はあまたに交らせ給はず、あなたうと聞えたり」とあるので、アタシ「他」と認めないのがよいと見られる。

なお、普通と異なる意の形容詞ホカシ「損敗他形」(他形者係百保可之伎所多知 又異形)「(新訳華嚴經音義私記)の例があるので、「(他時)」「(萬一九四七)・「(異手枕)」「(萬二四五)」の例は、ホカシトキ・ホカシタマクラと訓む可能性もないではない。ただ、ホカシの例は他に見えないようであり、和歌に用いられるかどうか分からないので、萬葉集の例はアタシと訓む方がよいと思われる。

- (4) 『日本語学』8—10 [1989.10]
- (5) [1989.10 岩波文庫、第9刷] (1941.2 第1刷、1949.9 第3刷改版)
- (6) [2000.2 同、第31刷] (1936.11 第1刷、1948.12 第8刷改版)
- (7) [2003.2 同、第26刷] (1933.8 第1刷、1956.11 第22刷改版)
- (8) 『国語語彙史の研究』24 [2005.3 和泉書院、予定]
- (9) 『専修国文』43 [1988.9]
- (10) 「同」44 [1989.2]
- (11) 別稿(一)「ケシ・カシイ・カイ」(『同志社国語学論集』[1983.5 和泉書院]・二)「アキラケシイ——ケシ・カシイ・カイ続考——」(『帝塚山学院大学日本文学研究』15 [1987.2]・三)「カ・ク・ケシ」(『叙説』14 [1987.10]・四)「一次的ケシ型と二次的ケシ型」(『国語語彙史の研究』20 [2001.3 和泉書院] 参照。
- (12) 竹内史郎氏(一)「ミ語法の構文的意味と形態的側面」(『国語学』55—1 [216] [2004.1]・二)「ム型・ブ型・ミス型動詞とミ語法」(『萬葉』191 [2005.1] 参照。
- (13) 別稿(五)「上代の清濁と語彙——オホー・オボー(イフー・イブー)を中心に——」(『美夫君志』68 [2004.3] 参照。
- (14) 『現代短歌全集』4 長塚節集 [1930 (昭和五)・5 改造社] (『長塚節』『斎藤茂吉全集』24 [1953.4 岩波書店] による)
- (15) 「アララギ」二十五周年記念号 [1933 (昭和八)・1] (同)
- (16) 『長塚節研究』上 [1944 (昭和一九)・3 筑摩書房] (同)
- (17) [1930.5 岩波文庫、再版] (1928.7 初版)
- (18) [1942.8 中央公論社] (『斎藤茂吉全集』34 [1954.8 岩波書店] による)
- (19) [1962.7 白玉書房] (『近代作家研究叢書』62 [1989.10 日本図書センター] による)

(20) 『斎藤茂吉全集』34「前掲」による。

(21) 「1981・10 新潮文庫」(この本にこのような記述があることは、岡島昭浩氏の御教示によって知った。尤も、その後知ったがそれ以前にその本は購入していた。)

(22) 『200 CD フォーク・ソング・コレクション』[2003・7 立風書房] 第4章の「シクラメンのかほり 小椋佳」の項(岩田由記夫氏執筆)には、

じつは、当時のシクラメンは香らなかったし、うす紫の品種もなかったが、それが儚いこの曲の美しさにかえって貢献している。ちなみに現在は品種改良され、香りもうす紫の花もあるそうだ。この曲の力だろう。

(23) 島野功緒氏『日本語ミステーク読本^{テレビや新聞でも間違っていたらどうする?}』[1995・6 ワニ文庫]は、「かほり」はキャバレー仮名」と題して、

昭和五十年三月、無名の音楽家・小椋佳が作詞・作曲した『シクラメンのかほり』は、布施明の絶妙な歌唱にのってたちまちベストワンに。集計的にもミリオンオーバーの大ヒットとなった。／この歌には、心に引かれることが数々ある。まず題名の「かほり」である。よい匂いを意味する、薫、香、あるいは馨。いずれも「かおり」であって、「かほり」ではない。／「おかしいよ」／と言ったら、そばにいた女子学生が、／「旧仮名じゃありませんか」／と、したり顔で答える。／「バカいうな。旧仮名なら、かをりだ」／「ああ、そうですかア」／これが国文学科の学生というから、あきれる。／「でも、歌劇やなんかには、「かほり」って、芸名の人いますよ」／なるほど、宝塚にもいたかな。いや、キャバレーにならなくさんいる。／(略)／とすると、「かほり」は旧仮名でも新仮名でもない、キャバレー仮名というわけか。／後日知ったことだが、「かほり」は、小椋佳の夫人の名前なのだという。つまり、これはおのろけタイトルだ。／

「清しい」も気になる。爽^{さわや}かで気持ちのいいことを、「清々^{すがすが}しい」という。これは現在でも使われている。古い言葉では、清らかな女性を、「清^{すが}し女^め」と呼ぶ。／だが、これを口語体にした「清しい」は、ちよっとおかしくはないか。ほかのフレーズはぜんぶ話し言葉だから、「清しい」だけが、ぽつんと浮き上がって見える。「清しき」なら、まあ、わかるけれど。／

もう一つ気になるのは、作者の名前。／この人は有名銀行の元行員で、小椋佳はもちろんペンネーム。この「佳」の音は「カ」であって、「ケイ」とは絶対に読まない。／(略)

と述べている(館谷笑子氏の御教示による)。

右に「歌劇やなんか」・「宝塚にも」とあるが、宝塚歌劇には、淀かほる(1930・1・2生、1946年宝塚音楽学校入学、1993・9・19没)がいたことがある。

なお、小椋佳(本名、神田絃爾)の夫人の名は佳穂里である。また、小椋佳の「佳」は佳穂里の「佳」に因っている。これらのことは、

「佳さんと僕（小椋佳の世界）」（<http://www3.big.or.jp/~kan/ogura/oguraess.htm>）にTOM氏が述べている（山脇さや香氏の御教示に
よる）。

(24) [1984.12 岩波書店]、以下同様。

(25) [1985.4 同]、以下同様。

(26) [2001.11 岩波文庫、第45刷]（1933.7 第1刷、1978.4 第41刷改版）

(27) [1999.5 同、第1刷]、『白秋全集』6 歌集1～12 同7 [1986.1-1986.11 岩波書店]によれば、さらに例が拾える。

(28) 因みに、鈴木喜久雄氏「曲目解説」[2000.10.2] 1. マリー・イン・ザ・モーニング（CD「ELVIS BALLADS II」[BYCM-31057]）の
曲は1970.6.5録音）は、

余談だが、映画『エルヴィス・オン・ステージ』を見ていたシンガー・ソング・ライターの小椋佳氏がこの曲に出会ったときに「こ
れは今までの日本にはない新鮮な文体だぞ!」とショックを受けたと後に語っていた。昭和56年度日本レコード大賞を獲得した『シ
クラメンのかほり』の出だしの歌詞はこの曲をヒントに創作して出来たものである。

と述べている。そして、エルヴィス・プレスリーの「マリー・イン・ザ・モーニング」の前田洵子訳詞を見ると、

朝のマリーほど美しいものはない／眠そうな霞んだ目で 彼女が隣に寝ているのを見る／まるで夏の花を濡らす 雨のようにやさしく
／陽の光のように暖かく 彼女の金髪を輝かせて おお／（略）／

朝のマリーほど美しいものはない／夢のなかで虹をはるか彼方まで追いかける／寝返りをうって僕に触れる 彼女の顔に僕はやさし
くキスをする／するとマリーは目覚めて 新しい日を愛に生き始める／（略）／

夕方のマリーほど 愛らしいものはない／夜の影の接吻を受けて 星の光が髪を照らす／歩きながら僕は 彼女を抱き寄せる／そして明
日という日々をずっと二人で共に生きていく（同）

とあり、傍線部の原詩は

Nothing's quite as pretty / As Mary in the morning

Nothing's quite as pretty / As Mary in the evening（同）

とある。

(29) この節に挙げる例については、後の注に示すように、多くの方のお世話になった。他の節に挙げたことについて御教示のあったものと
合わせて、記して感謝の微意を表す。

(30) 青田寿美氏の御教示による。

また、坪内逍遙に

鼻高く眼清しく、口元もまた尋常にて、頗る上品なる容兒なれども、〔「当世書生氣質」〕、この部分の初出は一八八五〔明治一八〕年六月

晚青堂、『明治文学全集』16〔1889〕筑摩書房〕による）

色ハクツキリと白く、眼ハパツチリと清しく、鼻高からずまた低からず、〔「妹と背かゞみ」〕、この部分の初出は一八八六〔明治一九〕年一

二月 会心書屋、『同』による）

嵯峨の屋おむろに

何處かおちついた風もあつたが、其清しい目元と其意味の深ひしまつた口元を見れば、〔「薄命のすゞ子」〕、初出は「やまと錦」4

〔一八八九〔明治二二〕年三月〕、『同』17〔1971・11 同〕による）

此頃の日に焼付られ色は一層黒くなつて居るが、目の清しい利口さうな、善肉付いて健さうな小兒が〔「野末の菊」〕、初出は「都の

花」4—19〔同年七月〕、同）

広津柳浪に

睨まれると凄い様な、颯然されると戦付きたい様な、清しい可愛らしい重縁眼が少し催涙で、〔「今戸心中」〕、初出は「文藝倶楽部」

〔一八九六〔明治二五〕年七月〕、『同』19〔1965・5 同〕による）

などの例が見える（坂井二三絵氏の御教示による）。これらは、形容詞スガシの例であるならば左千夫の短歌や節の短歌の例より古いことになる。しかしながら、いずれも目ないし目元についての例であり、「すゞ」と振り仮名があつて、スズシ（イ）の例でありスガシ（イ）の例とは認められない。

(31) 青木稔弥氏の御教示による。用例の確認には比留川嘉子氏のお世話になった。

(32) 注(31)に同じ。春雨物語（ないし春雨草紙）の引用は、『上田秋成全集』8〔1993・8 中央公論社〕による（富岡本は、『天理図書館善本叢書』26秋成自筆本集〔1975・7 八木書店〕をも見て確認した）。

(33) 〔両活用形容詞——重複形容詞との関連から——〕（「甲南国文」42〔1995・3〕）

(34) 『室町時代語論考』〔1984・11 清文堂出版〕第二部七三

(35) 玉塵たまもに「近ハチカイトヨムソ 近来ト云ト同ソ チカシウコノカタト云心ソ」とあるので、シク活用チカシの例は室町時代に遡ることになる。

(36) シを含めて三首節の両活用形容詞のうち、重複形容詞との対応があるもので、鈴木（博）氏および村田氏がとり挙げられていないシク活用のは、ウマシ（竹取物語）・サムシ（長恨歌抄）・フトシ（松下集）のみである。これらは、それぞれ重複形容詞ウマウマシ（日

葡辞書)・サムザムシ(夏目漱石「明暗」^上)・フトフトシ(柳沢淇園「独寝」^下)より古い例であるので、同様にはとらえられない。このうち、ウマシ「シク活用」については、別稿(六)「ウマシキクニソとウマシクニソ——ウマシ「シク活用」の問題から——」(『萬葉』190 [2004・9])に、フトシ「シク活用」については、同(七)「動詞表記「敷」と形容詞語尾表記「敷」との間——シク活用フトシ「太」の成立について——」(『国語文字史の研究』7 [2003・11 和泉書院])参照。

(37) 『国語重複語の語構成論的研究』[1998・4 塙書房] 第四篇第一章参照。

(38) 別稿(八)「語基を共通にする形容詞と形容動詞」(『国語語彙史の研究』23 [2004・3 和泉書院])をも参照。

キーワード…スガシ(イ) 長塚節 伊藤左千夫 北原白秋 春雨物語

付記 本稿は、二〇〇三～〇四年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2)課題番号一五五二〇二九〇)による研究成果の一部である。

(『大阪大学大学院文学研究科紀要』45 [2005・3] 掲載)

補記 本稿の校正後、注(12)竹内氏(二)の題は「ム型・ブ型・ミス型動詞とミ語法の形態論的必然性による推移」と変わった。